

近代日本における美術品の 流出と集積

一大坂の豪商「加島屋」の経営危機と美術品コレクション

鈴木邦夫(2017.11.18日本女子大学)

講演の概要

[1] 日本女子大学のキャンパスと広岡浅子

- ・土地(学校敷地)の寄付者
- ・土地の前所有者
- ・土地の面積

[2] 美術品流出の波と新たに形成された 美術品コレクション

- ・文化の継承
- ・美術品流出の波
- ・新たに形成された美術品コレクションの特徴

[3] 広岡家からの美術品の流出

- ・加島屋の経営危機→1870年代 大量流出
- ・加島銀行の経営危機→残存していた中核部分の流出

[1]日本女子大のキャンパスと広岡浅子

- 広岡浅子と成瀬仁蔵が三井家に土地の寄付を働きかけて、現在のキャンパスの中心部分が開校時に校地となった。
- 校地(学校敷地)は誰が寄付したのか？
- 誰の所有地であったのか？
- 寄付された地番と面積は？

3つの記述の比較

- ・『日本女子大学校40年史』(昭和17年)
- ・『日本女子大学学園事典』(2001年)
- ・大同生命ホームページの「広岡浅子の生涯」

『日本女子大学校40年史』

(昭和17年)

- ・「三井一家から敷地の提供申出があり」、「三井一家から寄附された目白台5千5百余坪の地は、女子大学発祥の地となったのである」(65-67ページ)。
- ・「三井一家」という表現の意味:三井のひとつの家という意味ではなく、三井一門、三井一統、三井家全体という意味。

『日本女子大学学園事典』

(2001年)

- ・「三井三郎助」の項目では、「1900年には、三井家所有の目白台の土地約5520坪を学校敷地として三井総家より提供することを申し出る」(314ページ)。
- ・三井三郎助は、浅子の実家である小石川三井家の当主。浅子の甥。ただし、1849年生まれの浅子は、1850年生まれの三郎助を「愛弟」と呼んでいる。

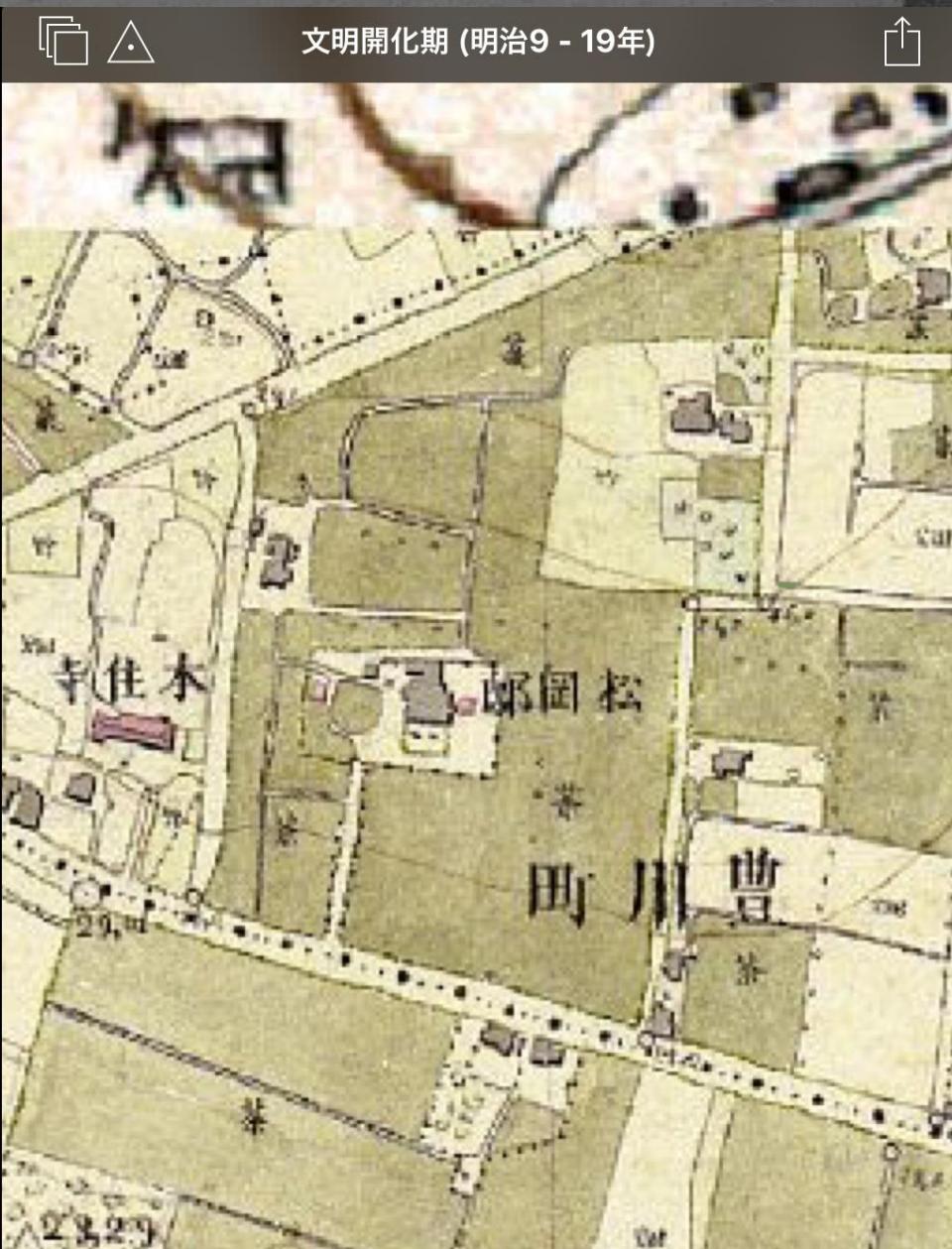
大同生命ホームページの「広岡浅子の生涯」

- 第三章「日本女子大学校の設立」では「目白台の土地5千4百余坪が、ある家より女子大学校に寄附される。寄附したのは、三井総領家当主、三井八郎右衛門高棟。そして元々の土地の所有者は、浅子が「愛弟」と呼んでいた、小石川三井家の三井三郎助高景だった」。



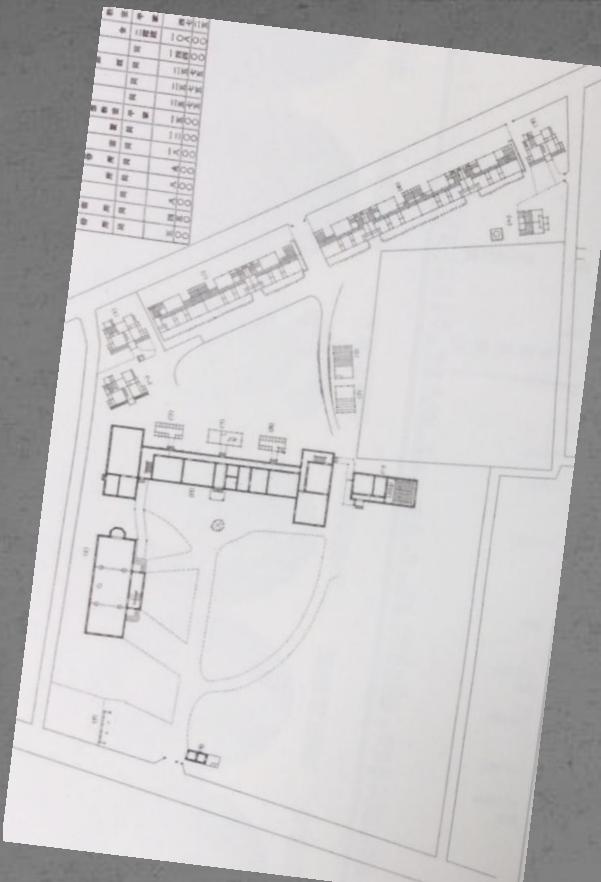
明治のおわり (明治36 - 42年)

[1]日本女子大学のキャンパスと広岡浅子



出所)「東京時層地図」。

[1]日本女子大学のキャンパスと広岡浅子



開校後まもない頃
の校地

敷地5520坪5合

出所)『日本女子大学校一覧』1902年(『写真
が語る日本女子大学の100年』2004年)。

譯 内 物 建												建 物	敷 地	日本女子大學校	
ダ	日	カ	リ	チ	ル	ヌ	リ	チ	ト	ヘ	水	ニ	ハ	ロ	イ
供 待 所	門 衛 所	同 所	便 利 所	湯 呑 所	浴 室	物 置	調 理 室	便 利 教 室	同	教 師 館	同	寮	理 化 教 室	高 等 女 學 校	大 學 部 (一部 分)
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	舍	同	同	八百二十三坪八合九勺
五 〇 〇	四 〇 〇	八 〇 〇	八 〇 〇	九 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	五千五百二十坪五合
五 〇 〇	四 〇 〇	八 〇 〇	八 〇 〇	九 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一一六坪
五 〇 〇	四 〇 〇	八 〇 〇	八 〇 〇	九 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	三九



[1]日本女子大学のキャンパスと広岡浅子

小石川区高田豊川町



18番

19番

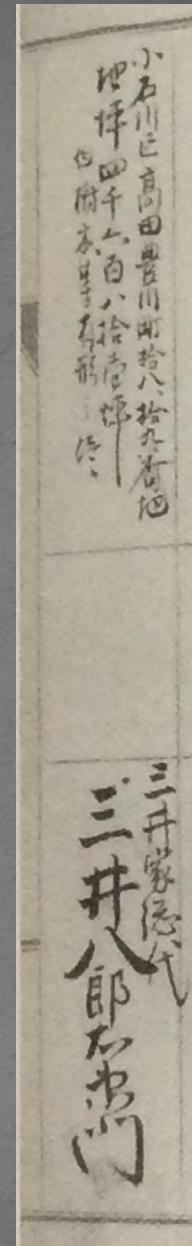
18番: 番1町4反4畝10歩

19番: 宅地351坪

2筆を合わせて、坪に換算すると、
4681坪

寄付された土地の地番と寄付者

- 「日本女子大学校寄附金簿」には「小石川区高田豊川町18、19番地 地坪4681坪」「三井家総代 三井八郎右衛門」
- 日本女子大学校創立事務所「日誌」(明治33年)の6月20日の条では、成瀬が三井八郎右衛門と三井高保に面会し、「三井家総代トシテ三井八郎右衛門ノ名ニテ土地寄附ノ事承諾セラレタリ」
⇒したがって、眞の寄付者は、三井八郎右衛門ではなく、三井11家。地番は高田豊川町18、19番地。
- なお、「日本女子大学校寄附簿」に記載の三井八郎右衛門5000円も、実際には三井11家の代表(総代)として八郎右衛門の名前で寄付したもの(三井家同族会で明治32年7月に寄付決定)。



開校後まもない頃の校地

- 三井11家寄付の地番は18番地と19番地
- 18番:「土地台帳」での地目は畠。畠1町4反4畝10歩→坪に換算すると、4330坪
- 19番:「土地台帳」での地目は宅地。351坪
- 合計は4681坪

留意点:農地には「縄のび」があるのが普通。登記上の広さよりも、実際の広さ(実測値)の方が広い。

- 『日本女子大学校一覧』(1902年)の数値:
敷地5520坪5合
- 麻生正蔵(第2校長)は「三井一統から日本女子大学発祥の地たる5千5百余坪の敷地」を寄付と回想(故三井寿天子刀自の追憶談)『雪の香』昭和18年)。
- 18番地と19番地を実測した数値と推定(縄のびは、約840坪)
- したがって、三井11家が寄付を申し出した土地の広さ=開校後間のない頃の校地の広さは、実測では5520坪5合、「土地台帳」(および「土地登記簿」)では4681坪。

誰の所有地であった土地か？

「地台帳」（東京法務局蔵）

高田豊川町一八番

誰の所有地であった土地か？

- 「土地台帳」に記されている所有者
18番、19番とも三井銀行。
三井家あるいは小石川三井家ではない。

(資料)三井銀行作成の「抵当品流込地所家屋報告表」「貸附金書抜表」をみると、明治23年11月30日に、返済不能のため林謙吉郎(貸付金の残高5512円)から抵当品(畠1町5反5畝16歩、宅地351坪、建物77坪75)が流れ込みとなり、三井銀行の所有となっている。

畠は、高田豊川町18番と雑司ヶ谷町33番の1、宅地は高田豊川町19番

所有権が移転された年月日と地番

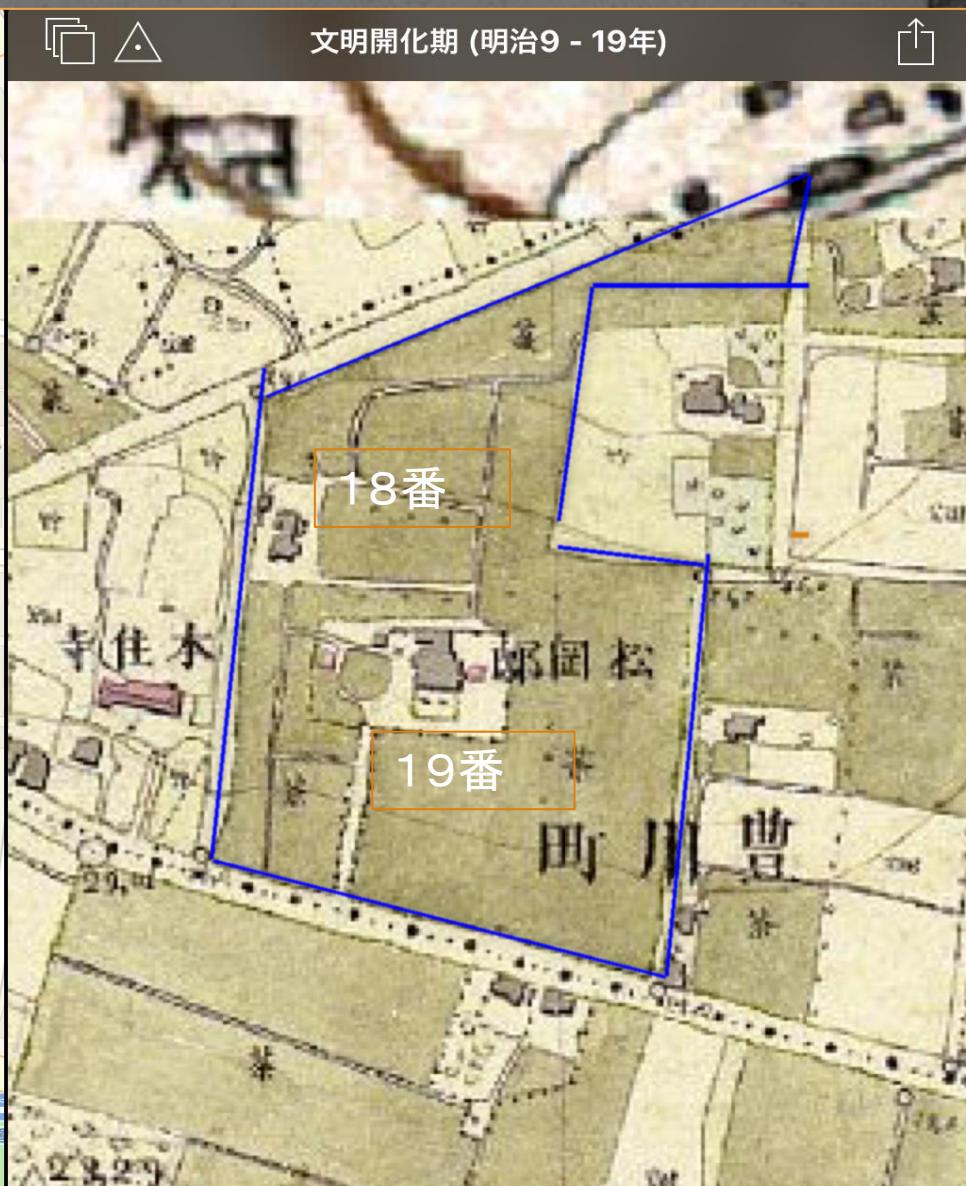
現在の文京区目白台一丁目二一八一一
(旧、高田豊川町一八番)の土地登記簿
(東京法務局蔵)

明治三拾九年參月拾六日受付第參〇式六号
同日付壳渡証書一依り
小石川区小石川高田豊
川町拾八番地財団法
人私立日本女子大学
校ノ為メ所有權ノ取得
ヲ登記ス

所有権が移転された年月日と地番

- 明治34(1901)年4月20日開校までに所有権が移転された訳ではない。18番の「土地登記簿」をみると、**移転の登記日**は明治39年3月16日。開校から5年後。**三井銀行**と**財団法人私立日本女子大学校**(明治38年5月27日設立)との間で明治39年3月16日に**売買契約書**が締結され、これにより所有権移転。つまり形式上は日本女子大学校が三井銀行から土地を購入。
- [推測]三井11家が買収資金を日本女子大学校へ供与することで、実質的に、土地を寄付。
- 寄付された土地の地番は、当初予定の高田豊川町18番、19番に加えて、**雑司ヶ谷町33番**の1も(土地登記簿で判明)。

三井11家が寄贈した土地(3筆)



[2]美術品流出の波と新たに形成された 美術品コレクション

- 文化の継承
- 美術品流出の波
- 新たに形成された美術品コレクション(集積)の特徴

文化の継承

- 近世(江戸時代)

江戸幕府の式楽:能楽

將軍・大名の交際礼法:茶道(抹茶道)

煎茶道

- 近代

衰退

幕藩体制崩壊により、能楽・抹茶道が衰退

復興

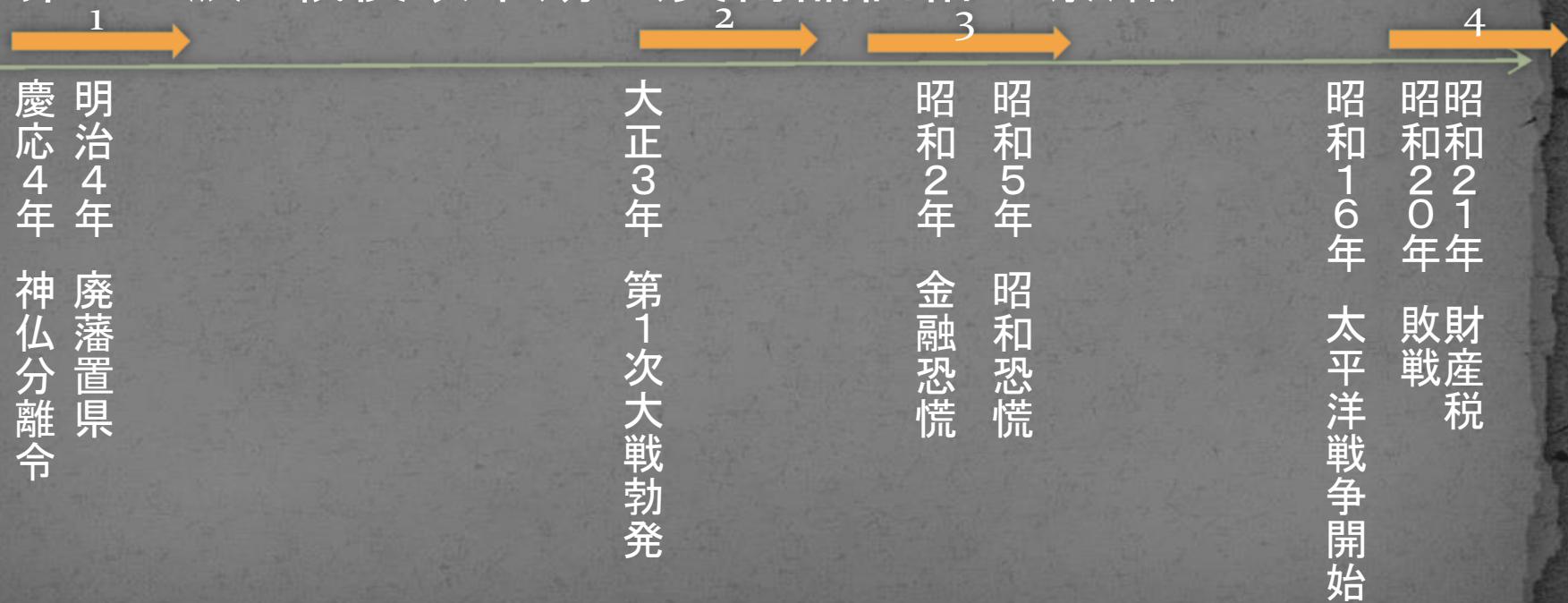
ブルジョアジー(資本家)と経営者が新たな担い手として、能楽[舞と謡]・抹茶道という文化を継承して復興。

興隆

衰退

美術品流出の波

- 第1の波 幕末・維新期(美術品価格の暴落)
- 第2の波 第1次大戦期(" 暴騰)
- 第3の波 景気低迷・大不況期(" 低下)
- 第4の波 戦後改革期 (美術品価格の暴落)



第1の波 幕末・維新时期

- 流出を促進した要因

- ◇ 慶応4年神仏分離令→廃仏毀釈運動→寺院の破壊、寺院経済の破綻

- ◇ 明治2年版籍奉還、明治4年廃藩置県→大名失職、江戸(東京)の屋敷を大幅に縮小
- ◇ 廃藩置県(慶応4年)による経済的混乱

- 流出元

- ◇ **寺院**

- 仏画・仏像・経典などが流出

- ◇ **旧大名家**

- 江戸屋敷に所蔵の美術品が流出

- ◇ **豪商**

- 経営危機に陥った商人(特に大名金融関係の両替商)から流出

- 例: 広岡家

第2の波 第1次大戦期

- 流通を促進した要因

◇大正3年大戦勃発後の好景気(物価高騰、土地・株・美術品価格の高騰)

◇大正5年華族世襲財産法改正←華族(旧大名家、旧公家)の家政の経済的苦境

◇第一世代のコレクターの死亡

- 流失元

◇華族(旧大名家、旧公家)

例: ①大正5年大藩だった仙台伊達家が堂々と名前をだして所蔵品を売り立て。落札額146万円(現在価値160億円)
②大正6年佐竹公爵家売り立て。「佐竹本36歌仙」35万3千円(現在価値39億円)

◇実業家(資本家・経営者)・政治家
死亡者の趣味を相続人が継承しないため売却

例: 大正6年赤星弥之助(英國兵器会社の代理人として海軍へ売り込み工作)の所蔵品売り立て。510万円(現在価値561億円)

第3の波 景気低迷・大不況期

- 流失を促進した要因
- 流出元

◇昭和2年金融恐慌

預金取付により

銀行破綻

◇昭和5年昭和恐慌



◇実業家(資本家・経営者)

銀行など企業の経営破綻に
ともない美術品売却

例: ①十五銀行破綻→昭和3年
松方公爵家・島津公爵家が
売り立て。89万円と106万円
②加島銀行破綻→昭和3年
広岡家が売り立て。81万円

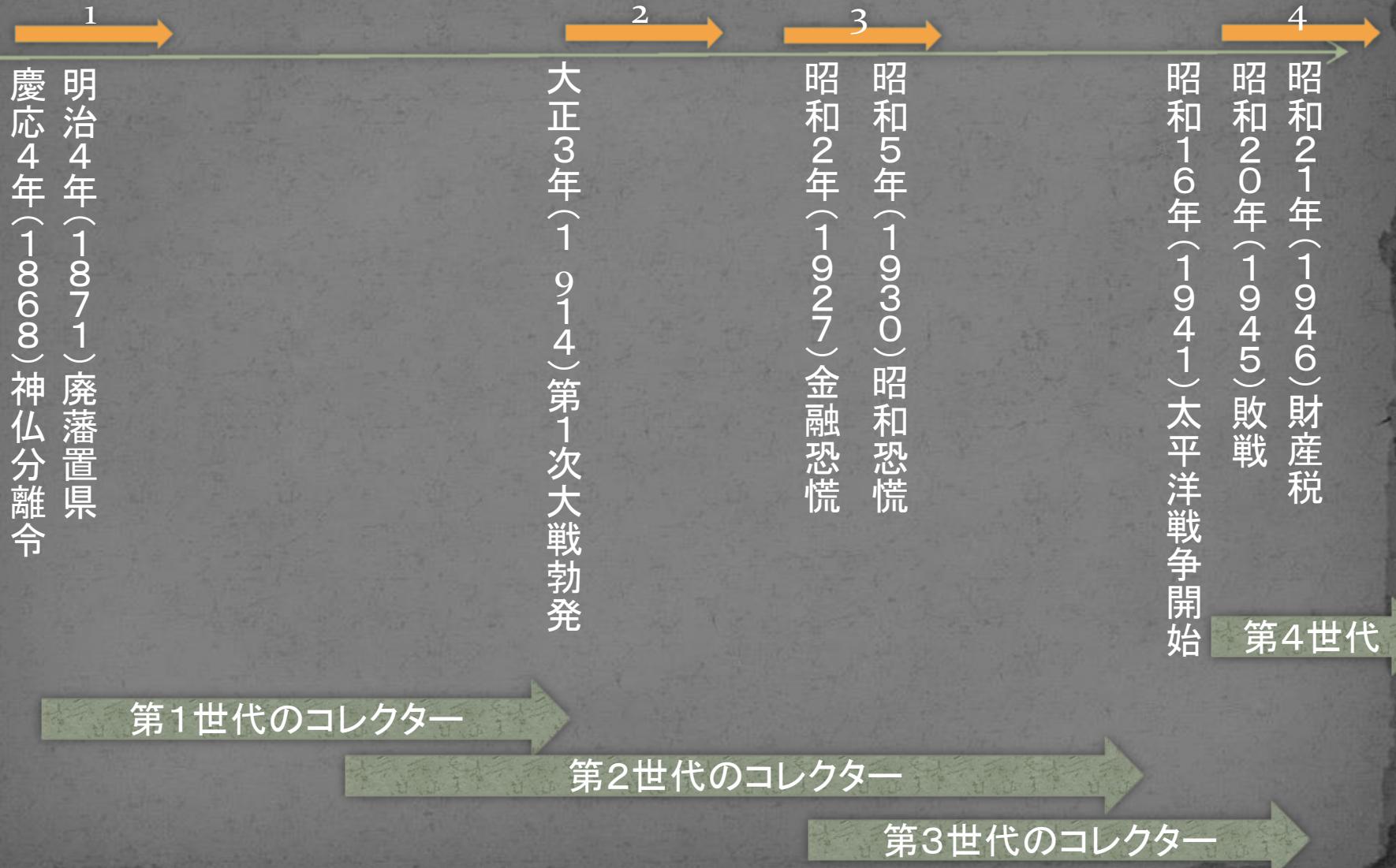
第4の波 戦後改革期

- 流出を促進した要因
- 1945年敗戦
- 1946年財産税
純資産に対して課税。超累進的な税率。税率25%（課税価格10万円超）→税率90%（課税価格1500万円超）

• 流出元

様々な資産家。より大きな資産家ほど高率な財産税課税。実効税率は住友吉左衛門家89%、三井高公家89%。
→益田鈍翁コレクションをはじめ大小の、夥しい数のコレクションが崩壊

近代における美術品コレクターの誕生



近代における美術品コレクターの誕生

- 第1世代

政治家: 井上馨 (1836-1915)

実業家: 川崎正蔵 (1837-1912) 大倉喜八郎 (1837-1928)

藤田伝三郎 (1841-1912) 岩崎弥之助 (1851-1908)

赤星弥之助 (1853-1904)

建築家: 柏木貨一郎 (1841-1898)

- 第2世代

実業家: 益田孝 (鈍翁、1848-1938) 根津嘉一郎 (1860-1940)

住友吉左衛門友純 (ともいと、1865-1926)

原富太郎 (1868-1939)

- 第3世代

実業家: 松方幸次郎 (正義の子、1866-1950, 西洋絵画、浮世絵)

大原孫三郎 (1880-1943, 西洋絵画)、長尾欽弥 (1892-1980)

- 第4世代

実業家: 五島慶太 (1882-1959) 菅原通済 (1894-1981)

服部正次 (1900-1974)

コレクターの主な事業とコレクションの現状

- 第1世代

政治家: 井上馨(崩壊)

実業家: 川崎正蔵(川崎造船所、明治23年川崎美術館設立→崩壊)

大倉喜八郎(大倉組。大倉集古館。現在の関係事業はホテルオークラなど)

藤田伝三郎(藤田美術館。現在の関係事業は藤田観光[椿山荘]など)

岩崎弥之助(静嘉堂美術館。三菱グループ)

赤星弥之助(兵器会社英國アームストロング社の非公式代理人。崩壊)

建築家: 柏木賀一郎(崩壊)

- 第2世代

実業家: 益田孝(三井物産。崩壊)

根津嘉一郎(東武鉄道。根津美術館)

住友吉左衛門友純(住友財閥・泉屋博古館)

原富太郎(原合名[生糸商]。崩壊)

- 第3世代

実業家: 松方幸次郎(川崎造船所。国立西洋美術館)

大原孫三郎(倉敷紡績。大原美術館)、

長尾欽弥(わかもと。長尾美術館→崩壊)

- 第4世代

実業家: 五島慶太(東急電鉄。五島美術館)菅原通濟(鉄道工業。常磐山文庫)

服部正次(セイコーホームズ。サンリツ服部美術館)

新たに形成された美術品コレクションの特徴

- [特徴1]茶道との関連で形成
 - 抹茶道:これとの関連で収集されたコレクションが主流。
 - 煎茶道:大正末から昭和初めに衰退するため、これとの関連で収集されたコレクションは傍流。
- [特徴2]仏教関係のものを収集

[特徴1]茶道との関連で形成

- ・抹茶道:これとの関連で収集されたコレクションが主流となる。
従来抹茶道で用いていた品に加えて、近世では抹茶道と直接の関連のない絵巻物(佐竹本36歌仙など)や巻物形式の歌集(伊勢集など)が切斷され、茶席の掛け物に転用。
- ・煎茶道:大正末から昭和初めに衰退するため、これとの関連で収集されたコレクションは傍流。
 - ・煎茶道のピークは明治10年代～20年代。しかし、盛んであつた関西で衰退(大正末～昭和初め)。
 - ・コレクションの内容は、焜炉、茶銚(ちゃちよう。急須)、茗椀(茶碗)などの煎茶道具[特徴は唐物趣味]、文房具、文人物の書・絵画、青銅器。

[特徴2] 仏教関係のものを収集

- 仏画・仏像・経典・高僧の書など仏教(とくに密教)関係のものを、信仰・崇拜の諸具としてではなく、美術品として収集。
- 抹茶道系のコレクション(集積)のなかに仏教(とくに密教)美術品が収集されている。

現在まで続いている大師会(大寄せの茶会)は、真言宗(密教)弘法大師の書を益田孝(鈍翁)が明治29年に披露したことから開始。

[3] 広岡家からの美術品の流出

- 加島屋の経営危機
→明治10年代前半頃に広岡家から大量流出
- 加島銀行の経営危機
(浅子はすでに死亡しているため関係せず)
→昭和3年に、残存していた部分が広岡家から流出。コレクション崩壊。

明治10年代前半の大量流出

- 幕末維新期の加島屋

明治4年廃藩置県により旧大名失職。旧大名の負債を新政府が継承し、公債に転換。うち、旧公債は無利息50年賦、新公債は3年据え置き、25年賦、利子4%。→加島屋ではそれまでの諸藩からの高利の利子収入が途絶え、それだけでなく諸藩からの借入に対する返済困難。

⇒加島屋、経営危機

- 浅子による経営再建

- ・借入先の旧大名家に対して借金減免交渉
- ・資産整理による資金化(美術品と不動産)

⇒明治17年広炭商店開業(石炭販売)、明治19年潤野炭鉱買収、明治21年加島銀行設立

浅子による経営再建と美術品の売却

- 明治37年3月、麻生正蔵(のち第2代校長)が浅子から経歴を聴取して筆記。この筆記によると、「文字通りに悪戦苦闘を続けて来られたのであります。特に明治9年後、即ち刀自が年齢29歳前後の数年間と云ふものは、… 実に刀自の最大苦心の時代であった様に思われますが、幸にもよく其の難局を切り抜けられ、家政を整理し、目出度くも家運の挽回の功を奏した」(「広岡刀自を憶ひて」『麻生正蔵著作集』1992年、320ページ)。

利益と生まない資産を利益を生む資産へと転換

- 利益を生まない資産

近世の時期に大量に蓄積された美術品と、自家用の不動産

- 美術品・不動産の売却

美術品・不動産の売却は、売却により取得した資金を、利益を生む資産へ転換するという一連の積極的行為のひとつと推定。

美術品・不動産の売却

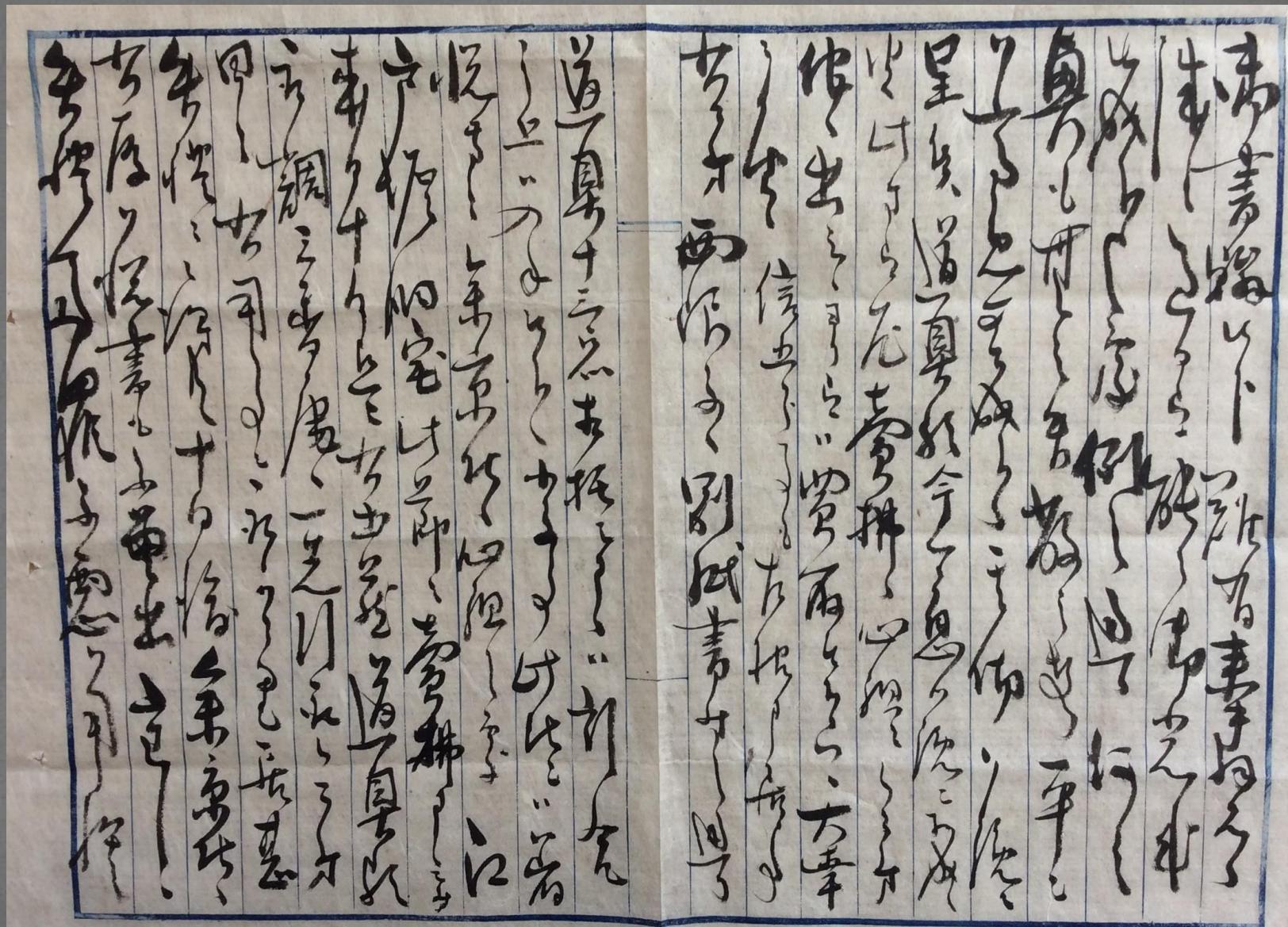
- 明治9年頃、実家の油小路三井家へ「13器」を上回る美術品を売却。他家へ「江戸堀旧宅」を売却。
- 明治10年10月5日、京都で売り立て(653点)
- 11月10日、残品(親引き分)売却
- 明治11年3月20日、京都で売り立て(703点)
- 明治11年11月、京都で売り立て(627点)
- 明治13年10月、実家の油小路三井家へ美術品39点売却
- 明治14年8月、9月、美術品売り立て(点数不明)

⇒2千点を上回る美術品が明治10年代前半頃に広岡家から流出(親引き分もまもなく売却と仮定して計算)

広岡家コレクションの内容

- ・倉林重幸氏(湯木美術館)の検討によると、
- ・嘉永元(1848)年8月24日、広岡久右衛門正饒(まさあつ)が表千家汲江斎から皆伝拝受
- ・近世に茶道具を大量に購入
(「広岡家と茶道」「大同生命文書解題」2013年7月17日版)
⇒抹茶道系のコレクションであることが想像される。
では、実際はどうかをこれから検討。

明治9年頃に実家の「尊父」に宛てた浅子の書状



出所) 小石川三井家資料(三井文庫所蔵)。

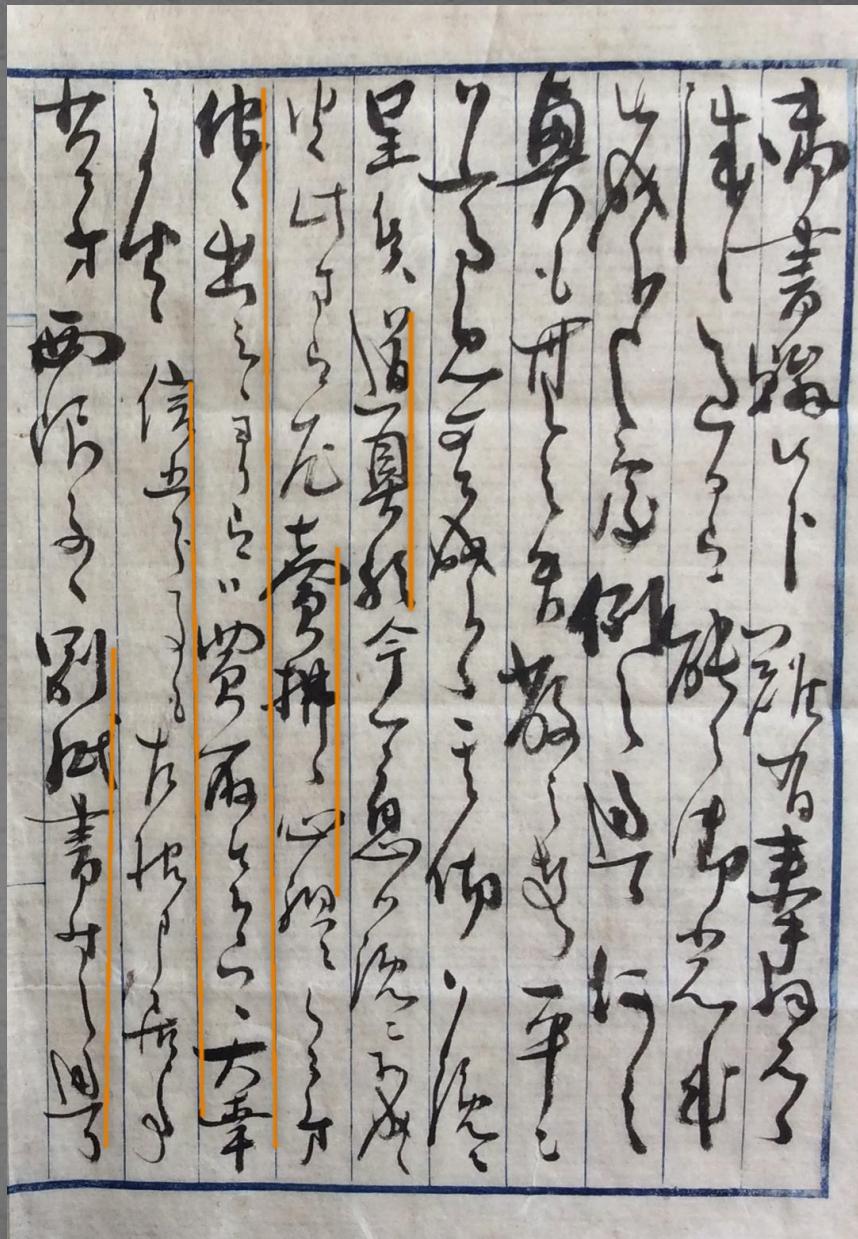
[3] 広岡家からの美術品の流出

之の如く事半而て物
半身の如くを事半而て
一毫の如くを事半而て
了了の如く物を事半而て
了了の如く物を事半而て
了了の如く物を事半而て
了了の如く物を事半而て
了了の如く物を事半而て

是れ又大之者
了了の如く

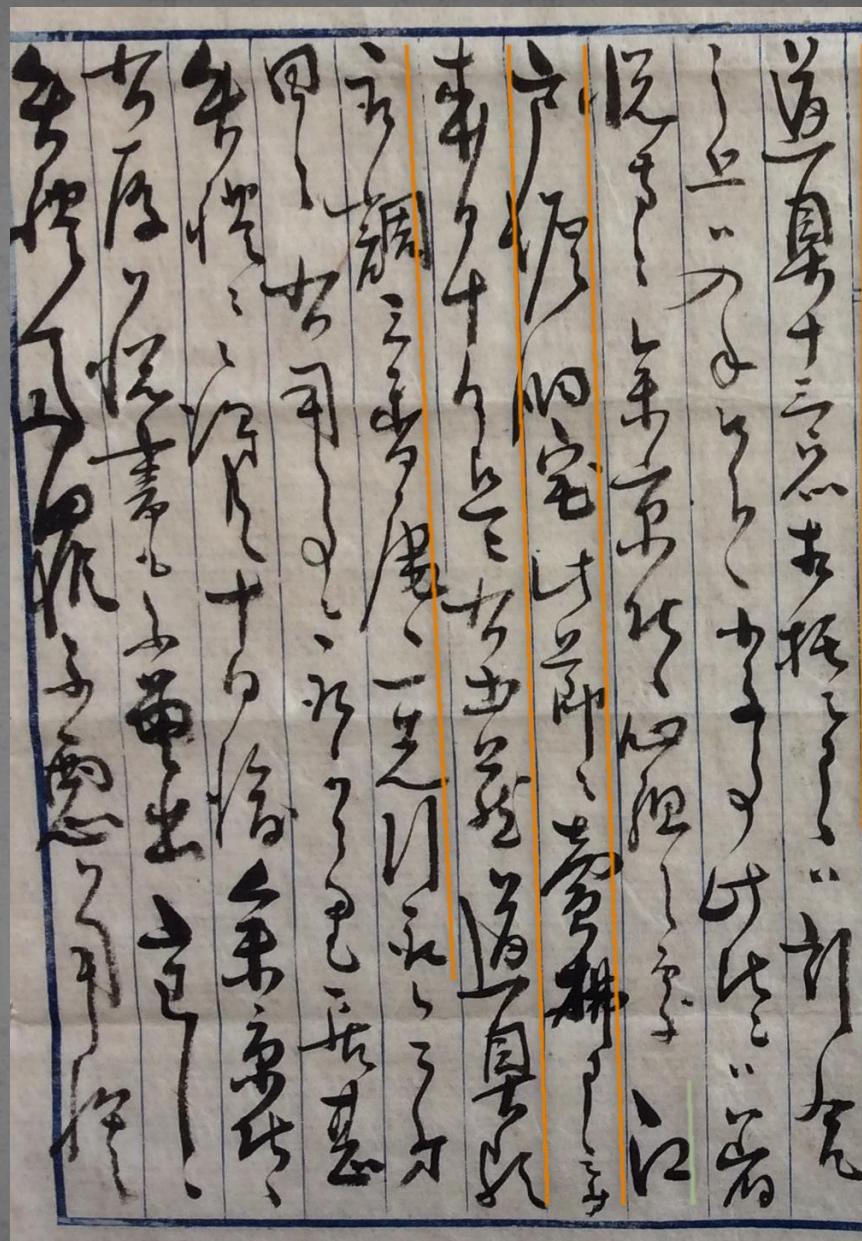
之の如く事半而て物

- 御書翰被下難有奉拝見候
- 誠ニ過日は能々御光来
- 被成下候処、例之通り何之
- 興モ無之失敬之段、平ニ
- 御高免可被成下候、其砌御覽ニ
- 呈候道具類今一応御覽ニ相成候
- 由、此方は凡売払候心組ニ候ニ付
- 他ニ出シ候ヨリは御買取被下候ハ御大幸
- 二御座候、信五郎子モ左様申居候事
- 右ニ付、西沢子ニ別紙書付之通り



[3]広岡家からの美術品の流出

- 道具十三器相托シ申候、御引合
- 之上御入手被下候、小子事此所一御着
- 悦方々参京仕候心組之処、江
- 戸堀旧宅、此節一壳払申候一付
- 来月十日迄二右土蔵道具類
- 取調、二香庵へ一先引取候二付
- 日々右用事二取かかり居、甚
- 失礼二候得共、十日後参京仕候
- 右故御悦書も不届出重々
- 失礼多罪不悪御用捨



[3]広岡家からの美術品の流出

- 之程、偏ニ奉希上候、猶委細之義は西沢子ヨリ御聞取之程奉願上候
一浮牡丹水指は後便ニ差出可申候、軸物類は別便ヲ以
差贈可申候、先は右之段急大乱筆前後御不一
之程願上候、已上
尊父大君
五月二日 広岡淺
呈閣下

浅子の書状の内容

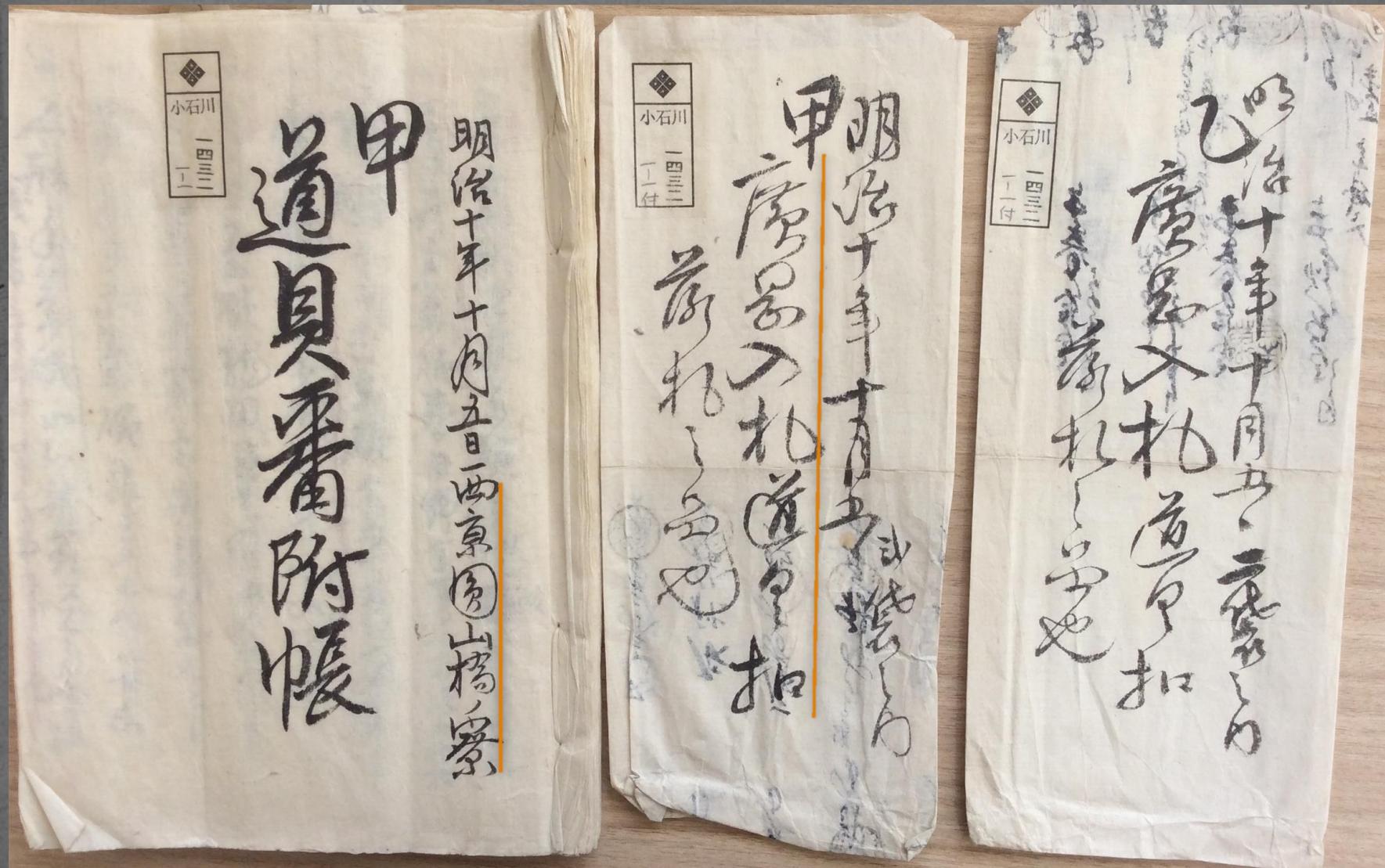
- 三井高喜（「尊父」）に買取を依頼した道具（美術品のこと）は、「道具13器」、「水指」1点、「軸物類」。
- 他の人々に売却するよりは、「尊父」に買い取ってもらえば大幸と夫（信五郎）も希望。

⇒売り立て（他の人へ売却）をおこなう前と推定。

- 「江戸堀旧宅」（広岡五兵衛宅＝信五郎宅と推定）を売却。「土蔵道具類」を三香庵へ移す予定。

⇒五兵衛家の土蔵にも美術品がかなりあり（取り調べに1か月以上）、その美術品を、広岡久右衛門家（土佐堀1丁目）の茶室である三香庵へ移動予定。

第1回売り立て(明治10. 10. 5)



出所) 小石川三井家資料(三井文庫所蔵)。

[3] 広岡家からの美術品の流出

明治末まで美術品取引の中心地は京都

- 明治45年でも東京から京都へ美術品を輸送し、京都で売り立てる例あり(391点、落札額23万円、現在価値25億3000万円)。
- 明治10年2月5日 大阪・京都間の鉄道開通
- 明治10年10月5日、京都で第1回売り立て(653点)

出品点数を後の売り立て会と比較すると、大規模な売り立てであることがわかる。大量の美術品を展示するため広い会場が必要。 [参考]大正14年井上馨家売り立てでは350点。

第1回売り立て(明治10. 10. 5)

第2回売り立て(明治11. 3. 20)

- 場所は、京都の円山「橋ノ寮」。円山は祇園の八坂神社が所在する地域。「橋ノ寮」は、円山にあった安養寺の塔頭「端之寮」(重阿弥の別称)。「東山第一楼」と呼ばれた酒楼。近世の時期に書画の展覧会開催(田中日佐夫『竹内栖鳳』)。

第3回売り立て(明治11. 11)

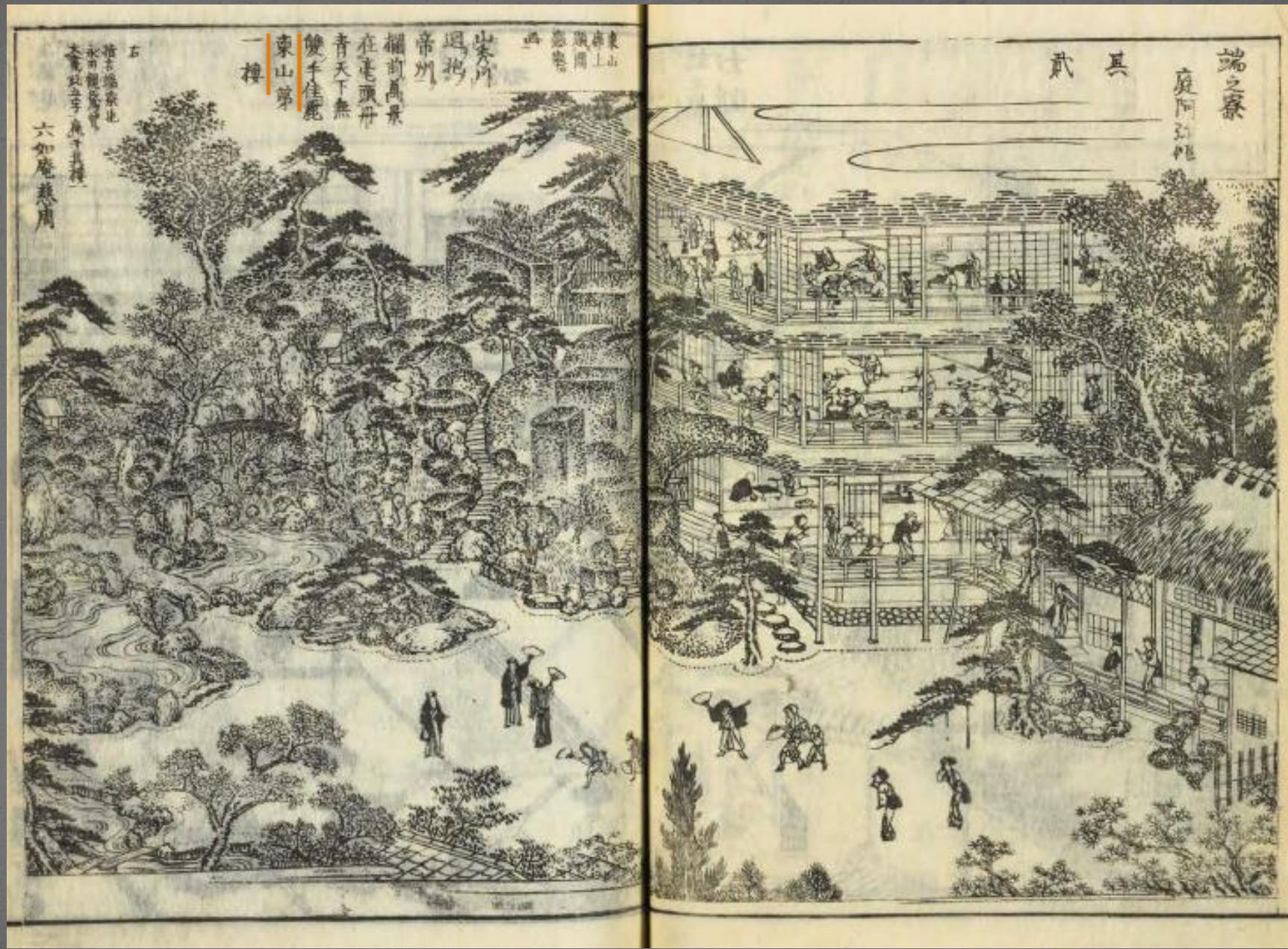
第4回売り立て(明治14. 8—9)

- 場所についての記載なし。第3回については、売り立ての詳細な記録が油小路三井家に残されているので、端之寮なのでは。

まるやま
円山
はしのりやう
玄端之寮
げんくわん



出所)『都林泉名勝
図会』巻2(1799年
刊)。



[3] 広岡家からの美術品の流出

売却品の内訳(判明分2027点)

	茶碗	茶入	棗	香合	茶杓	花生・花入	水指	釜	建水	軸物・掛物	その他	合計
第1回	67	36	34	50	20	54	35	20	9	44	291	660
第2回	63	35	36	50	35	53	30	30	16	76	279	703
第3回	65	25	40	46	25	42	37	20	9	86	230	625
三井家	16	1		2	4		1			12	3	39
総計	211	97	110	148	84	149	103	70	34	218	803	2027

茶碗211点、茶入・棗合計207点、香合148点、茶杓148点、花生・花入149点、
 水指103点、釜70点、建水34点、
 軸物・掛物218点
 (ただし、親引き分もまもなく売却として計算)

美術品流出の第1の波 幕末・維新期 (美術品価格の暴落)

- 美術品の大量流出⇒美術品価格の暴落
- とりわけ、抹茶道衰退のため、抹茶道で使用される美術品価格が暴落。

例:長次郎とノンコウの茶碗の落札額と現在価値。現在価値は極めて廉価。

落札茶碗の現在価値 (楽家初代長次郎、3代ノンコウ)

売り立て	品名	落札額	現在価値
明治10.10.5	ノンコウ黒四方茶碗 不見斎 銘四海	小判20両1貫100文	82万4500円
同上	長次郎 黒 宗拙箱	親引き	-
同上	長次郎赤茶碗 ぬれ鳥	金5両5貫文	22万5500円
同上	長次郎黒茶碗 哺啄斎銘安眠	金6両ト6分	30万7500円
同上	長次郎黒茶碗 仙叟塩屋	金3両銀5両118文	8万2000円
同上	ノンコウ割高台茶碗	金1枚銀3枚9分9厘	9万4300円
明治11.3.20	ノンコウ黒茶碗	小判2両8分	16万4000円
同上	長次郎黒茶碗 如心箱	金6両ト2貫111文	25万4700円
同上	長次郎黒茶碗	銀2枚 155文	3万5900円
同上	ノンコウ赤 如心 海老	銀5枚100疋8分8厘	9万8400円
明治11.11	長次郎 黒茶碗 苔衣	銀5枚11文	8万8200円
同上	ノンコウ黒平茶碗	金5両3貫文8分	21万7300円

[参考] 長次郎黒茶碗 銘東陽坊(現在、重要文化財)を万延2(1861)年に鴻池善右衛門が金500両で購入。

第一回 売り立ての落札記録

（道具番附帳）

一、高麗刷毛目茶碗 三作
改式十五両也

(中略)

一、人形手茶碗
如心斎箱、覺々斎添
〔←親引き〕

青井戸茶碗 銘春日野



大正期に「瀬尾」(現在、福岡市美術館)、「竹屋」(現在、個人蔵)と
をあわせて『東都青井戸の三名物』と呼ばれた。

李朝時代、高さ6.4cm、口径14.7cm(湯木美術館蔵)

出所)五島美術館『鈍翁の眼—益田鈍翁の美の世界—』。

[3]広岡家からの美術品の流出

高額落札品(金100両以上)

- 第1回 青井戸茶碗 春日野 金150両 銀50枚 (現在価値 703万円)
染付張古牛香合 金100両 銭50貫文 (現在価値 431万円)
青磁砧龍耳花生 金200両 銭30貫文 (現在価値 832万円)
唐物手鉢 金100両 銭150貫文 (現在価値 472万円)
黄瀬戸向付 金250両 銭159貫文 (現在価値 1087万円)
吉野龍田蒔絵硯箱 金600両 (現在価値 2460万円)
- 第2回 金更紗打掛 金700両 銭50貫文9分5厘 (現在価値 2891万円)
交趾黄鴨大香合 金150両 銀1貫目 (現在価値 616万円)
- 第3回 黄瀬戸丸向付 小判200両 銭100貫文8分 (現在価値 820万円)
呉州周茂叔香合 金150両 銭150貫文 (現在価値 616万円)
三作茶碗 金120両 銭100貫文 (現在価値 492万円)

落札額の総額と広岡家手取り額

- 第1回 銀485貫321匁4分5厘
- 第2回 銀363貫949匁5分7厘
- 第3回 銀384貫183匁8分7厘
- 落札額合計 銀1233貫454匁8分9厘 (1万2334円55銭)
[現在価値5億0572万円]

⇒手数料(22%)を差し引いた広岡家手取額は

銀916貫766匁1分7厘 (9167円66銭)
[現在価値3億7587万円]

- 広岡家美術品売却手取り総額

明治13年に実家(油小路三井家)へ売却分700円(現在価値2870万円)を加算した現在価値は4億0457円。他に第4回売り立て分あり。

明治17年広岡商店開業

- 大量の美術品と自家用の不動産を売却

⇒売却して資金を入手し、その資金を事業に運用。すなわち利益を生む資産へ充当したと思われる。

- 広岡商店開業

現在確認できる広岡家最初の新規事業は明治17年開業の、広岡商店。筑豊の石炭を国内販売。それだけでなく、広岡商店が三井物産を通じて石炭を海外に輸出するため、明治18年、浅子が三井物産と交渉して「広岡信五郎代理 浅」と記して自ら契約。

- 潤野炭鉱の取得(明治19年)

さらに明治19年に広岡家が潤野炭鉱を取得。浅子は三井銀行と交渉して、潤野炭鉱を担保に、自らの名前で借入(三井銀行「貸附金調書」明治26年4月30現在では「広岡アサ」借入残高2万5000円。現在価値5億5000万円)

- 加島銀行設立(明治21年)

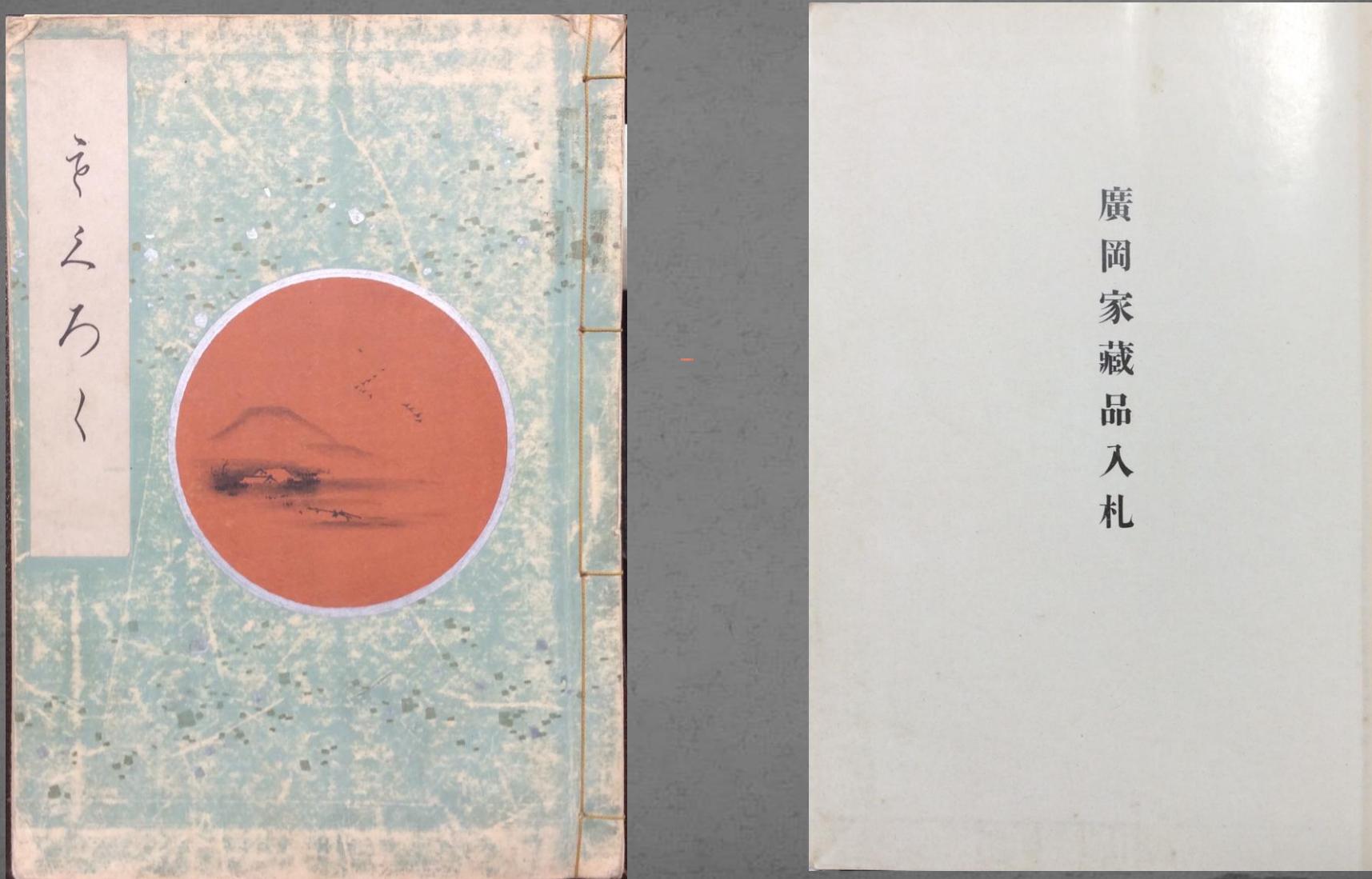
金融恐慌と銀行の経営危機

- 昭和2年金融恐慌発生
 - ・各地銀行で預金の取付(預金引き出し)→銀行の経営危機
 - ・加島銀行でも預金取付→経営危機
- 加島銀行(株式を大阪株式取引所に上場していた中規模の銀行)公称資本金3020万円、払込資本金1887万5000円(現在価値1038億1250万円)
 - ・頭取は広岡恵三(浅子の娘・亀子の夫)
 - ・総株数60万4000株のうち、広岡合名会社38万2510株、広岡恵三2000株、広岡久右衛門2000株、大同生命6830株。

加島銀行の損失処理(不良債権処理)

- 昭和3年に、広岡恵三から美術品の売り立てについて相談をうけた高橋義雄は、広岡家の「経営に係る加島銀行の業務上に受けた打撃の為め、蔵器を売却して其欠陥を補充する必要を生じ、6月18日大阪美術俱楽部に於て入札を決行」、「大阪広岡家は同地の旧家で且つ道具持ちであったが、維新後其大半を売却して残る所は余り多数ではなかった」と記している(『近世道具移動史』)。
- ⇒広岡家が売り立てをおこなう意図は、売り立てで得た資金を加島銀行に提供して、加島銀行の損失を補填するため。ただし、実際の昭和3年の不良債権処理方法は、所有する加島銀行株の約80%(払込金額944万円、現在価値519億円)を銀行に無償提供(寄付)して損失を補填。したがって美術品売り立て金の使途を特定できない。

広岡家売り立て目録(昭和3.6.18入札)



[3]広岡家からの美術品の流出

『もくろく』掲載品

- 243点(写真を掲載)
- 「名物紅葉呉器の茶碗が出るというので大評判となり、東京は勿論、名古屋、金沢、九州地方より下見に来る者少なからず、大阪美術俱楽部創始以来の大盛況を來した」、「40点の親引きがあつたに關わらず」(『書画骨董雑誌』昭和3年8月号)、
- 落札総額80万7094円20銭(現在価値44億3902万円)⇒手数料22%を引いた広岡家手取額62万9533円47銭(現在価値34億6243万円)

主要な落札品 (1万円の現在価値5500万円)

- 紅葉呉器 18万9900円 (現在価値10億4445万円)
- 飛青磁花生 4万3500円 (同2億3925万円)
- 磺青磁袴腰香炉 3万8930円 (同2億1412万円)
- 雪舟筆雪景山水図 3万1000円 (同1億7050万円)
- 古赤金欄手六角香炉2万7990円 (同1億5395万円)
- 長次郎赤茶碗 2万5100円 (同1億3805万円)
- 金欄手丸紋向付 2万2100円 (同1億2155万円)
- 李安中筆鶴、徽宗筆鶴鴿、松花堂筆竹雀、三幅対
2万1800円 (同1億1990万円)
- 金欄手洗蓋瓶 1万9690円 (同1億0830万円)
- 徽宗筆梔子小鳥図 1万6100円 (同 8855万円)
- 東山義政公作茶杓 1万5900円 (同 8745万円)

古陶器価格の入札記録

- 広岡家入札以前では、
第1位 窯変天目茶碗 16万7000円
(大正7年3月18日、稻葉子爵家売り立て)
(現在、静嘉堂美術館所蔵)
第2位 松屋肩衝茶入 12万9000円
(昭和3年5月28日、島津公爵家売り立て)
(現在、根津美術館所蔵)
- 広岡家の紅葉呉器茶碗の落札価格18万9900円は、古陶器でそれまでの入札史上の最高価格。住友吉左衛門友成(ともなり)が購入。

(参考)その後の最高落札品:高麗割高台茶碗20万円(昭和15年6月12日、鴻池男爵家売り立て、現在、畠山記念館所蔵)

紅葉吳器茶碗



泉屋博古館

朝鮮時代、高さ8.6cm 口径13.4cm

総体は紅葉を連想させる淡紅色を呈すが、側面には、斜めに四ヶ所、高台にも一ヶ所、釉の掛けはずしが見られる。

出所) 泉屋博古館ホームページ(<https://www.sen-oku.or.jp/collection/col10/003.html>).

紅葉呉器茶碗(逸話:浪速の三名物の名碗比べ)

- 「文化文政頃[1804-1830]には既に同家の家宝と為つて居た、
当時大阪に紅葉呉器茶碗を所蔵して居た者は右廣岡家と平瀬及び鴻池家であつたが、或時此三家がお互い一つ茶碗を持ち寄つて比較研究して見やうではないかと云ひ出した、而して当時鴻池の主人は爐雪と号した大数寄者であつたが、いよいよ茶碗を持ち寄つて他家より劣りては面白ないとて、内々お出入道具屋に聞き合せた処が、果たして自家のが劣つて居ると見極めが附いたので、爐雪が当日両家の茶碗を十分に観覧し終つて、斯かる名品を拝見しては手前のは到底太刀打が出来ませぬから今回は御免を蒙りますとて、とうとう遁げ出して仕舞つたさうだ」(高橋義雄『近世道具移動史』)。

なぜこのように高額となつたのか

(現在価値10億4445万円)

- [理由1] 強力な対抗者の存在。馬越恭平の札は13万円余り。この馬越をも上回る対抗者が永坂町三井家(三井守之助。茶人として著名)のよう。高橋義雄は、「落札者が春海商店一人であったが為め種々の憶測も行はれたが、其行先は永坂三井家なる事今や疑を容る可らず、果して然らば誠に適品適所と云つて宜からう」(『近世道具移動史』)と記している。
- [理由2] 明治期に住友家は関西における煎茶道のリーダー的存在。大正期に抹茶道へ転換したため、飛び抜けて評価の高い茶碗を欠いていた。飛び抜けた優品をえるため、極めて高額で応札。

広岡家美術品の流出先

- 油小路三井家(小石川三井家)へ大量に流出
明治9年頃、13点以上
明治13年、39点
明治10年代の売り立てでも入札
- まとまって流出した家はほかに確認できない。
- 一品で流出経路(伝来)を確認できるのは、
 - ・青井戸茶碗 銘春日野
明治10流出...道具商戸田露吟...松岡松生庵...益田鈍翁(三井)...湯木貞一(吉兆)...現在、湯木美術館
 - ・紅葉呉器茶碗 銘龍田
明治10流出...益田鈍翁...佐藤助九郎...現在、富山佐藤美術館
 - ・紅葉呉器茶碗
昭和3流出...住友吉左衛門...現在、泉屋博古館
 - ・李安中筆鶴、徽宗筆鶴鵠、松花堂筆竹雀、三幅対
昭和3流出...馬越恭平(ビール王).....画家白川一郎...現在、白川遺族と推定
 - ・ノンコウ(道入)黒茶碗 銘残雪
昭和3流出...安田靱彦...現在、楽美術館
 - ・礎青磁袴腰香炉 銘青柳
昭和3年流出...服部正次...現在、サンリツ服部美術館
 - ・黄金天目茶碗
昭和3流出...中村準策...現在、寧楽美術館

現在、存在を確認できる広岡家旧蔵品

流出年月日	品名	落札額	現在価値	現所蔵者(所在地)
明治10.10.5	青井戸茶碗 銘春日野	金150両、銀50枚	703万1500円	湯木美術館(大阪市)
同上	紅葉呉器茶碗 銘龍田	金千疋108文	10万2900円	富山佐藤美術館(富山市)
昭和3.6.18	徽宗皇帝鶴鶴 左李安忠鶴 右松花堂竹雀	2万1800円	1億1990万円	白川一郎家(東京都)
同上	紅葉呉器茶碗	18万9900円	10億4445万円	泉屋博古館(京都市)
同上	ノンカウ黒茶碗 銘残雪	3490円	1919万5000円	楽美術館(京都市)
同上	長次郎万代屋黒(もずやぐろ)茶碗 利休所持	3590円	1974万5000円	楽美術館(京都市)
同上	唐物丸壺茶入 銘早苗	7600円	4180万円	滴翠美術館(芦屋市)
同上	磁青磁袴腰香炉 銘青柳	3万8930円	2億1411万5000円	サンリツ服部美術館(諏訪市)
同上	黄金天目茶碗	898円	493万9000円	寧楽美術館(奈良市)
同上	能阿弥 月見布袋横物	親引き		大阪くらしの今昔館(大阪市)

この他に、①明治10年10月流出の「長次郎 赤茶碗 ぬれ鳥」(金5両5貫文、現在価値22万5500円)は大正期に伊藤吉六(名古屋市)所蔵、現在、不明、②明治11年11月流出の「長次郎 黒茶碗 苔衣」(銀5枚銭11文。現在価値8万8200円)は、現在、個人蔵のよう(インターネット上に画像あり)。

青井戸茶碗 銘春日野(かすがの)



出所)五島美術館『鈍翁の眼—益田鈍翁の美の世界—』。

現在価値:703万円

[3]広岡家からの美術品の流出

紅葉呂器茶碗 銘龍田(たつた)



(富山佐藤美術館蔵)
現在価値: 10万円

出所)『茶の湯美術館 全国』。

[3]広岡家からの美術品の流出

紅葉呉器茶碗



泉屋博古館

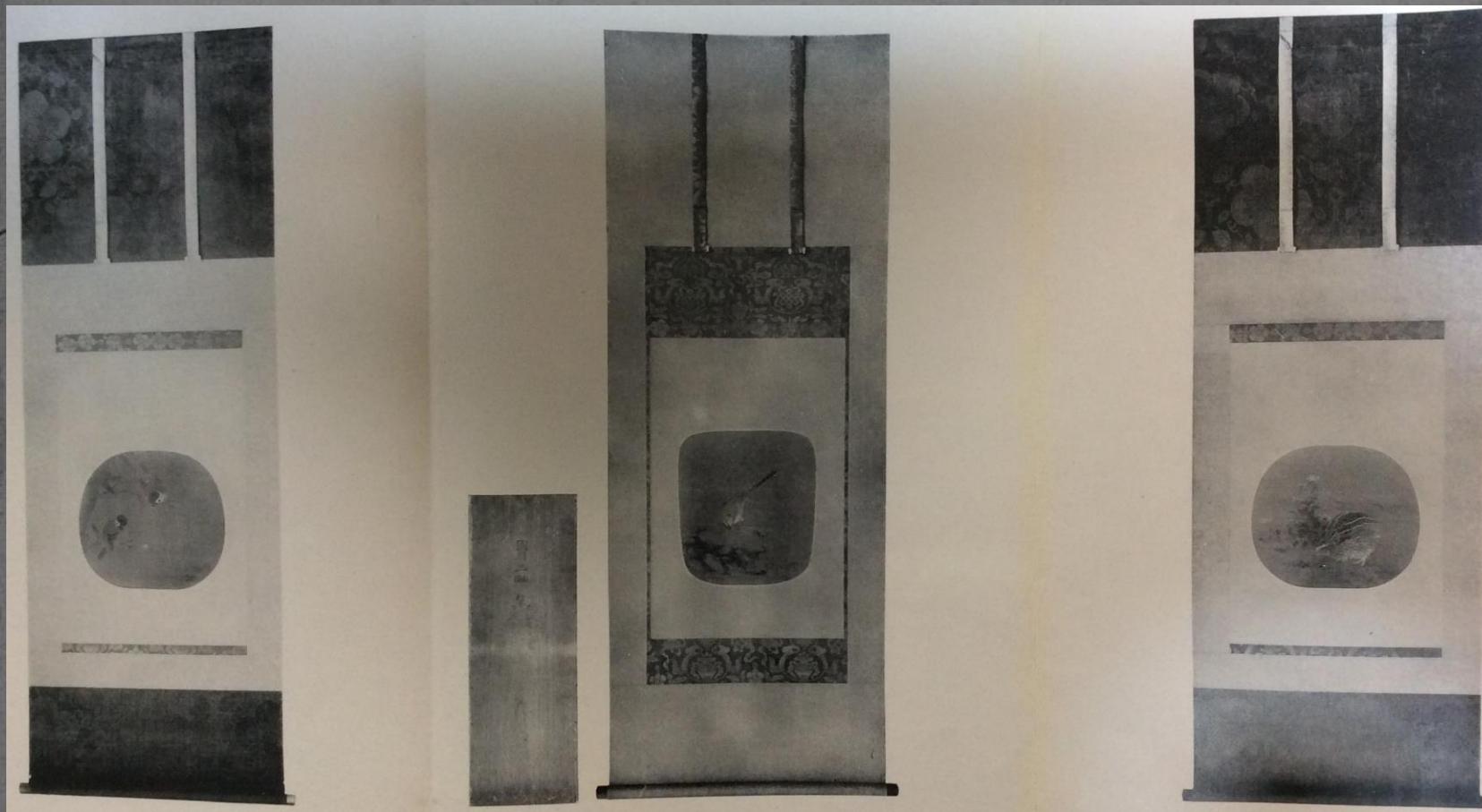
(泉屋博古館蔵)

現在価値: 10億4445万円

出所) 泉屋博古館ホームページ(<https://www.sen-oku.or.jp/collection/col10/003.html>).

[3]広岡家からの美術品の流出

徽宗皇帝鵠鵠 左李安忠鵠 右松花堂 竹雀 三幅対



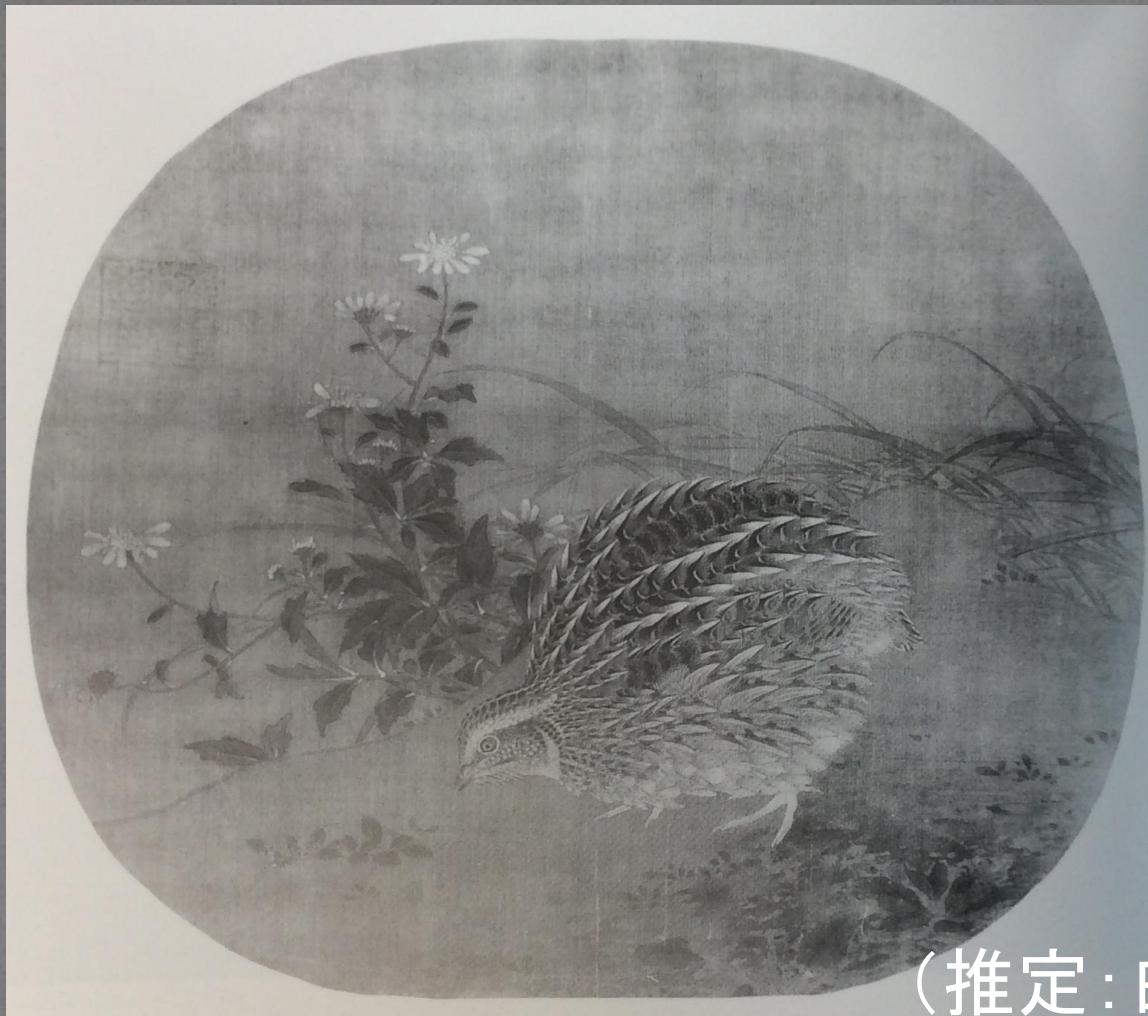
出所)『もくろく』(広岡家、昭和3年6月18日入札)。

現在価値:1億1990万円

[3]広岡家からの美術品の流出

李安忠の鵠図は、昭和14年5月27日に国宝指定(所蔵者は馬越恭二)

李安忠筆 鶴図(重要文化財)



(推定:白川家蔵)

出所)『国宝・重要文化財大全 絵画下巻』。

[3]広岡家からの美術品の流出

磁青青磁跨腰香炉 銘青柳



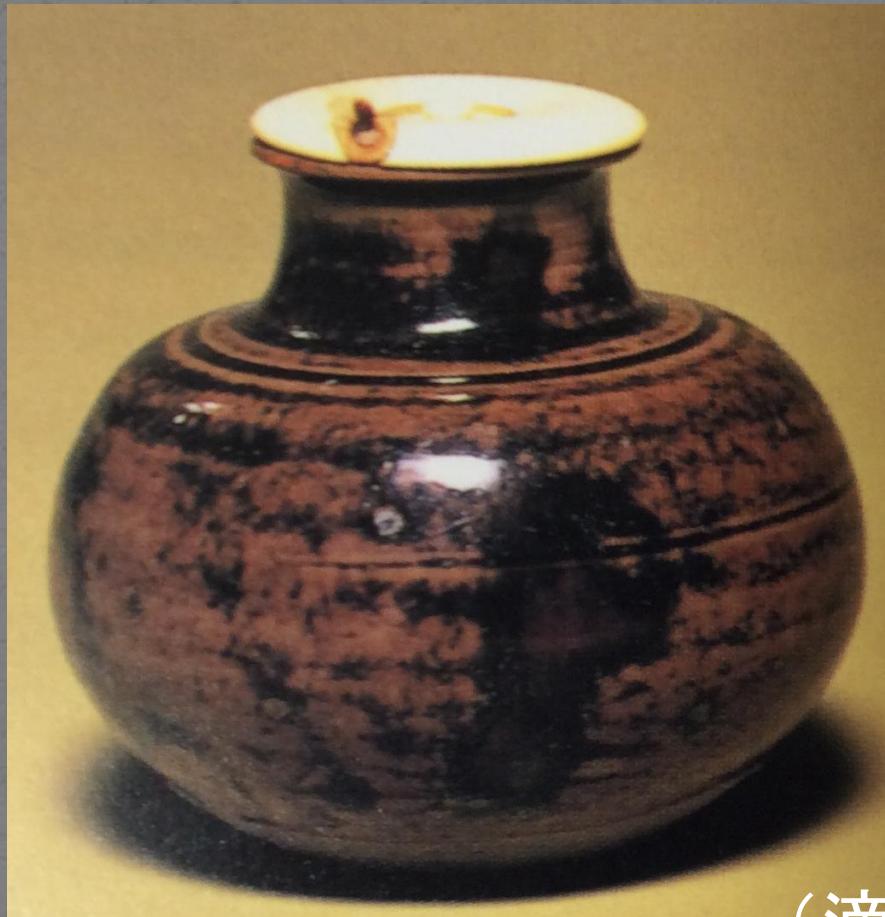
(サンリツ服部美術館蔵)

出所)サンリツ服部美術館『名品聚』。

現在価値: 2億1411万円

[3]広岡家からの美術品の流出

唐物丸壺茶入 銘早苗



(滴翠美術館蔵)

出所)『茶の湯美術館 京都・関西』。

現在価値: 4180万円

[3]広岡家からの美術品の流出



滴翠美術館

山口銀行(のち昭和8年に鴻池銀行、三十四銀行と合併して三和銀行)の山口吉郎兵衛が収集した美術品を所蔵・展示。

今、唐物丸壺茶入 銘早苗を展示中

[3]広岡家からの美術品の流出

出所)滴翠美術館ホームページ([1](#))。

黄金天目茶碗



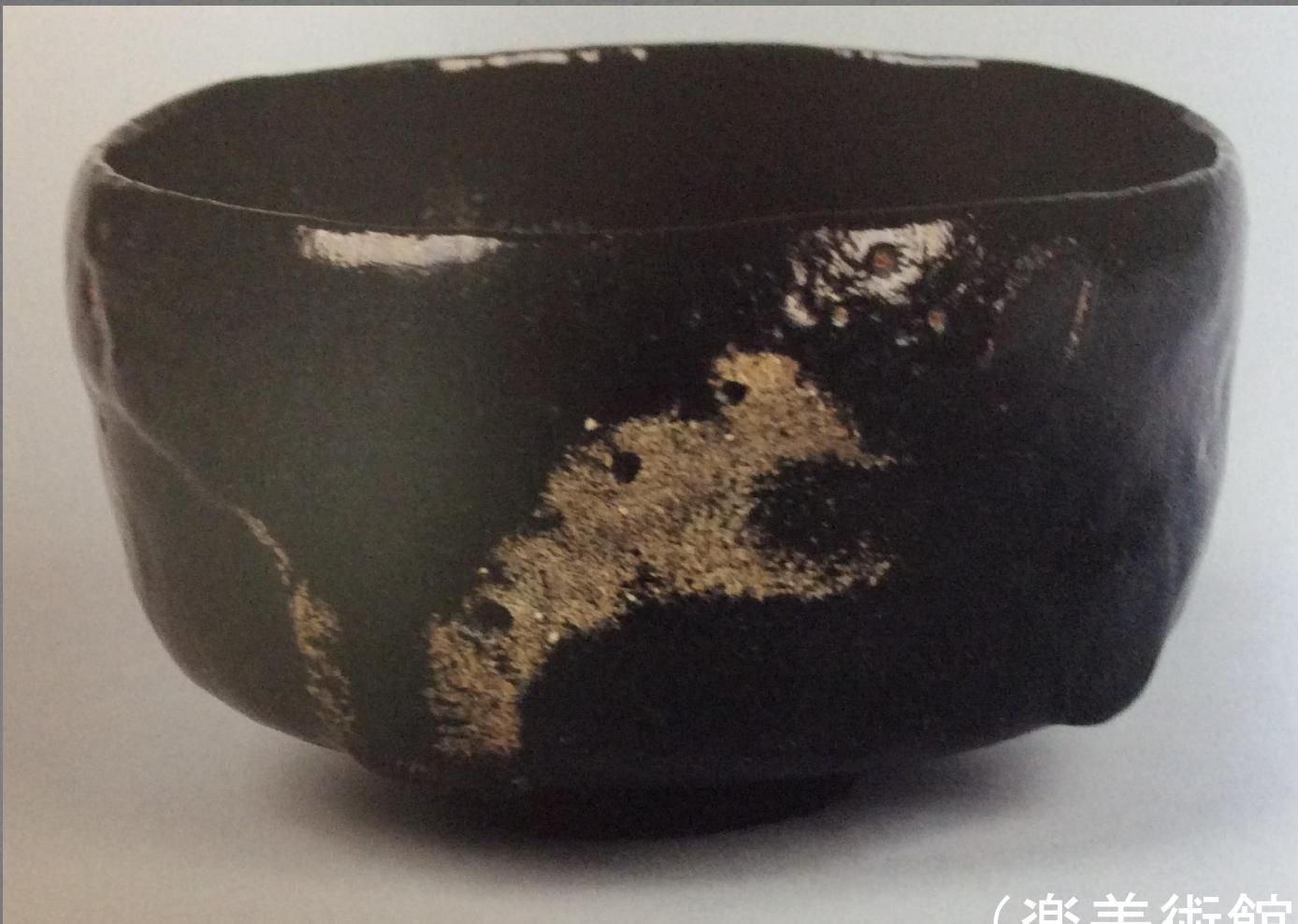
(寧樂美術館蔵)

出所)産経新聞奈良支局「朝ドラのモデル『加島屋』ゆかりの黄金茶碗」

(<http://sankei-nara-iga.jp/news/archives/4885>)。

現在価値: 493万円

ノンコウ黒茶碗 銘残雪



出所)『茶の湯美術館 京都・関西』。

(楽美術館蔵)
現在価値: 1919万円

[3]広岡家からの美術品の流出

長次郎黒茶碗 銘万代屋黒(もずやぐろ) 利休所持



「春期特別展」

樂歴代の名品 秘蔵の長次郎を見る

利休所持・利休の婿 万代屋宗安伝来
黒樂茶碗「万代屋黒」

2012年3月10日(土)～6月24日(日)

開館時間・午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)

休館日・月曜日(祝日は開館)

入館料・大人900円、大学生700円、高校生300円、中学生以下無料

主催・樂美術館、京都新聞社

後援・京都府、京都市、NHK京都放送局

樂美術館 RAKU MUSEUM

〒602-0923 京都市上京区油小路通一条下る 電話：075-414-0304

[3]広岡家からの美術品の流出

出所) 樂美術館ホームページ(https://raku-yaki.or.jp/museum/exhibition/past_exhibitions.html)、「樂美術館 樂歴代の名品 秘蔵の長次郎を見る」(http://sokuu.exblog.jp/iv/detail/?s=18234837&i=201205%2F03%2F54%2Fb0044754_19292728.jpg)。

現在価値: 1974万円

長次郎黒茶碗 銘万代屋黒

- 高橋義雄編『大正名器鑑』作成の際にも、高橋が現物を確認できていなかった作品。
- 昭和3年に広岡家から流出したこの作品が、2012年3月に楽美術館の展覧会に突然、楽家「秘蔵の長次郎」として出現。この時に配付の展示品目録には「利休一万代屋宗安・**加島屋広岡家伝来**」と表示。
- 堀の商人・万代屋宗安は利休の娘婿。秀吉に仕えていた茶頭八人衆のひとり。万代屋黒の箱蓋の裏に、啐啄斎(表千家8代、1808年没)が、利休が所持し万代屋に伝來したもので「万代屋黒と云」と記している。

楽美術館

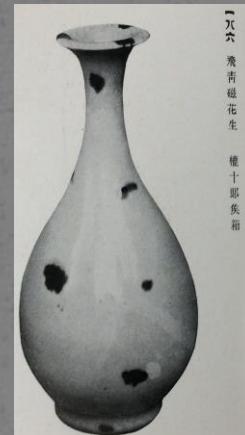
- 1977(昭和52)年財団法人楽美術館設立
- 1978(昭和53)年11月楽美術館開館
(京都市上京区油小路通一条下る)
- 楽家
初代 長次郎(天正17[1589]年没)
3代 道入(ノンコウ)(明暦2[1656]年没)
- 1997年『茶の湯美術館 京都・関西』刊行頃、楽美術館の所蔵リスト(茶碗)には長次郎作3点(黒楽茶碗 銘面影など)、ノンコウ作6点(広岡家旧蔵の銘残雪を含む)。長次郎作の万代屋黒なし。この書籍刊行後に万代屋黒を購入か。
- 現在、広岡家旧蔵の長次郎万代屋黒とノンコウ残雪は、楽美術館を代表する蔵品となっている。
今、万代黒を楽美術館で展示中(12月24日まで)

おわりに

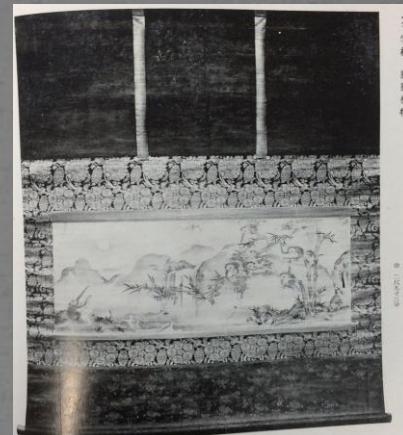
- 広岡久右衛門家の美術品(1920年に高橋義雄が久右衛門家を訪問したとき展示)



紅葉呉器茶碗

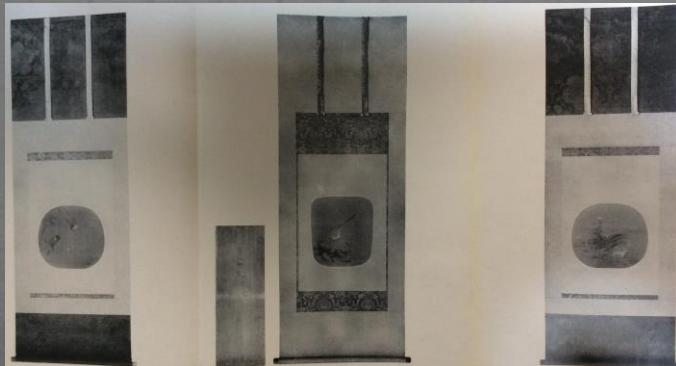


飛青磁花生



雪村筆
猿猴

- 広岡五兵衛家の美術品



徽宗・李安忠・松花
堂 三幅對

『国華』昭和4年2月号に掲載の際、広岡恵三旧蔵とある。

広岡家コレクションの特徴

- 近世に抹茶道系のコレクションとして形成
(倉林氏の研究から想像されたとおり)
- 仏教(とくに密教)美術品が、広岡家売り立て品のなかに2点
しかない(昭和3年売り立ての仏画[十一面觀音、不動尊])。
但し、近世で茶席に掛ける高僧の書を除く。
- なお、明治以降に購入された可能性のある品は、川端玉章
の画(2幅)と長三州の画・書二幅対(昭和3年売り立て)。
明治以降に購入したものはわずかのよう。
- ⇒したがって、近代に形成される抹茶道系の大コレクション
(特徴のひとつが仏教[とくに密教]美術品の収集)とは異なる。

終了

近代日本における美術品の流出と集積

一大坂の豪商「加島屋」の経営危機と美術品コレクション